



川久保さんが昨年秋に新設した牛舎。奥には島に16基ある風車が見える。

山地区に新築した。多くの農家が、便利で気心の知れた自宅がある地区に仕事場を持つものだが、彼は一〇キロほどの距離を日々行き来している。彼がこの地区に牛舎を構えたのは、すでに和牛の繁殖に取り組んでいる親戚の存在が大きく、今後何かと相談しやすくお互いに助け合える心強さがあつたからかもしれない。

彼が畜産業を目指す中でお世話になった師匠ともいえる方が、和牛の繁殖農家である山村茂巳さん（後述、山村秀樹さんの父）と白石

博宣さんだ。川久保さんは一年の間、一週間ずつ交互にお二方から研修を受け、繁殖農家としてのノウハウを学び、腕を磨き自信をつけていった。この島ではそういった師弟関係が若者を育て、やがては優秀な農業後継者を生み出しているようだ。

島内では一六戸

の葉タバコ生産農家があるが、川久保さんは畜産に加え約一六〇アールの圃場で年間三七〇〇キログラムの葉タバコを生産している。葉タバコの栽培では、四月から七月にかけて害虫予防の薬剤散布に追われるため、飼っている牛の病気や出産などが重なればとても忙しくなる。これから事業拡大し、飼育頭数を増やすとしたら、この課題は乗り越えなければならない。

飼料の移入も本土に比べれば費用がかさみ、競り市への出荷の際もフェリーを利用するので手取りは減る。それでも、島内での青年団や同業者との飲み会は楽しみだという。ストレス発散の場でもあり、情報交換の場でもあるため、自然と会合の回数も増えるらしい。

最後に夢を聞いてみた。うーん、と考えた挙句出てきた言葉が、「でっかいトラクターを現金一括で買う」。私たちにしてみれば、ポーンとカッコよく札幌投げて高級車に颯爽と乗り込むようなものかもしれない。夢に向かってこれからも邁進してもらいたい。

父子で八〇頭の母牛を飼育

田口公平さんは二四歳。諫早市いさはやにある県立農業大学校を卒業し、福岡県久留米市の肥育農家で研修を受けたあと地元でUターンした若手の後継者だ。帰郷前には、彼の父も保有している家畜人工授精師の国家資格を取得した。

彼の主な仕事場は、自宅から二キロほど離れた同じ西宇

戸地区内にある「タグチファーム」。迫力ある風力発電の風車に囲まれた二つの牛舎で約八〇頭の親牛を飼育している。入口では手製の看板が迎えてくれた。

彼にとって、幼い

頃から遊び場としていた牛舎の経営主、つまり父親と、大島地区の畜産農家の方々が師匠。身近に手本となる方がいるとは、なんとも幸せなことであるし、親子や身内の関係が疎遠になりがちな現代社会にあっては羨ましいことでもある。

親子で経営している強みで、地区の行事などで多忙な時でも、お互いに時間を調整し合って仕事に従事できるなど助かっている面もある。それでも、牛の健康管理は油断大敵。牛にとっても、風邪は万病のもとで、肺炎や下痢といった人間と同じような病気を抱えることがあり、苦労も多いようだ。

田口さんは畜産業のほかに、水稲を五〇アール、飼料については一五ヘクタールもの耕作面積を抱えている。棚田が多く、中山間地域の離島ではかなり多いほうではないだろうか。



田口公平さん (24)。

また、離島であるため牛舎の建築費がどうしても割高になつてしまいが、若者らしく意欲満々で、可能な限り増頭したいという。

楽しみはいろいろな会合で酒を酌み交わすことと、仔牛の競り市に行くこと。自分が手塩にかけて育て、自信を持って送り出すので、その価格がやはり気になるのだという。予想通り、あるいはそれ以上の高値で取り引きされると、仲間と飲む酒の味もまた格別であろう。まさに「仕事が趣味であり、生きがい」といったところだ。

夢はキャトルセンターの建設

山村秀樹さん、三〇歳。彼も田口さんと同様、家業が畜産農家であり、農業高校、県立農業大学校を卒業後、島原市の畜産試験場に勤務し、繁殖管理や飼料作物の作付けを業としてきた。

後継者として帰郷することを考えてはいたというが、何せ小さな島。もともと若者が少ない上に、同級生が一人も残っておらず、不安や寂しさもあったようだが、思い切つてUターンした。

彼の父、山村茂巳さんは、「現場後代検定成績日本一」の種雄牛「勝乃幸^{かつのさち}」の生みの親である。「日本一の種雄牛」ともなれば後を引き継ぐのもさぞかしプレッシャーがあるのではと思っていたが、幸い彼は明るくポジティブな様子。これならスムーズにお父さんに弟子入りできたであろうし、



山村秀樹さん(30)。

彼の人懐っこさをもつてすれば、地元の青年団や畜産部会にもすぐに溶け込んでいったであろう事は容易に想像できる。

久しぶりに帰ってきたとは思えないほど、日頃から活発に活動し

ている姿をあちこちで見かけると同様に地元のイベントでは必ずといってよいほど顔を見かけるので、その多彩な活動ぶりもうかがえるというものだ。

彼の牛舎は田口さんの牛舎とそう遠くないところにあり、やはり白い風車に囲まれている。さらには玄界灘を間近に見下ろすという絶好のロケーションを誇る。このような場所なら、家畜だけでなく世話をする人もストレスなく過ごせるだろう。

彼の作業は一日一二時間。四五頭の親牛を飼い、飼料作物を約七ヘクタール、水稲約五〇アールを父親と二人で管理しており、なかなか多忙な毎日だ。昨年一月には待望のお嫁さんを迎えたので、多忙ぶりがいくらか緩和されるのではと思われた。しかし、夢を聞いてみると、親牛を六〇頭まで増やすこと、そしてキャトルセンター(生産者

の労力削減と飼育頭数拡大のため、仔牛を生産者から預かる施設)の建設だという。

現在は、生後五カ月から九カ月の仔牛一〇頭ほどを、島外のキャトルセンターに預けているが、一頭あたり一日六五〇円から七〇〇円の経費がかかるとのこと。月二〇万円ほどの計算になる。幸い家族も増えたとし、彼の持ち前のポジティブさと明るさを持つてすれば、島内にキャトルセンターを構えるという夢が現実のものとなるのも、そう遠くないのではないだろうか。

行政支援の有効活用を

平戸市では、牛舎などの整備費用の最大三分の二(増頭数に応じて上限額あり)を補助する「平戸式もうかる農業実現支援事業」を実施している。また、国の「畜産クラスター構築事業」や県の「肉用牛パワーアップ事業」を組み合わせて活用もできる。その結果、三〇頭以上の経営を目指す農業者には、対象経費の八〇パーセント補助を実現してきている。

島に若者が戻ってくることはもちろん、島人の生活を支えてきた基幹産業に若者が就くことは喜ばしいことだ。これからも島で働きたい若者を迎えるため、行政としてもできることに取り組んでいきたい。

工藤大介(くどう だいすけ)

昭和33年、山形県大曲市生まれ。昭和56年、島根県松江市に転居。島根県立大を卒業後、島根県立大に勤務。その後、島根県立大に勤務。島根県立大に勤務。島根県立大に勤務。